



三浦節子さん。秋田の創作こけしの第一人者として活躍。全国規模のコンクールで数々の受賞歴があるほか、明治神宮献納品を多数制作



町のこけし屋さん

[さぎまい工房] 潟上市飯田川飯塚字大面18-3 TEL.018-877-4023

頬かぶりの父ちゃん母ちゃん、めでたい絵柄の干支こけし、穏やかな笑みの「お地藏こけし」、招福のカエルやフクロウのこけし…。工房の中には、思わずクスッと笑ってしまうこけしや心和む表情のこけしが所狭しと並んでいる。

願うは来年「前進あり」

作者の自由な発想で造形する「創作こけし」を作って45年。頬かぶり姿の父ちゃん、母ちゃんを中心に農家の3世代を描いた「みちのくファミリーシリーズ」などのヒット作を持つ潟上市飯田川の「さぎまい工房」。寒さ深まる10月下旬、工房では干支のこけし作りが始まっていた。

1998年から制作を続ける干支こけし。来年の干支「子」は2作目になる。「今回は、ネズミの顔を上向きに描いて、前進あり」との願いを込めました」と絵付けを担当する三浦節子さん(67)。毎年買い足して十二支を集めようとするファンが全国にいる。「80代の方で『干支こけし集めをこれからの生きる目標にしたい』と言ってくださった方がいた。頑張っ続けていければと気合いが入りました」



「みちのくファミリー」の父ちゃん、母ちゃん、女の子。同シリーズは昭和30年代、三浦さんが子ども時代に訪ねた近所の農家をイメージして制作

逆境をバネにする

子どもの頃から絵を描くことが趣味だった三浦さん。21歳のとき、製材会社を営む父に言われてテーブル脚の用材に絵を描いた。それが取引先から好評で絵柄入りの木製品を作るようになる。製品の一つに、父がろくろを回して木を削り、三浦さんが絵を入れた置物用の大型こけしがあった。

あるとき、三浦さんは「厳格な父を笑わせたい」と思い、頬かぶり姿のこけしを描いて父の誕生日に贈った。父は大いに笑って喜んだ。こけしは応接間に飾られ、客人の笑いを誘い、「売ってほしい」と注文を受けるようになった。次第に「父ちゃんこけしがあるなら母ちゃんこけしも。次は子ども…」とキャラクターが

笑いや和みを届けたい

これまで制作したこけしは数え切れない。本人そっくりに描く「似顔絵こけし」をはじめ、「祝こけし」「お地藏こけし」「二日酔父ちゃん」など数々のシリーズも生まれた。干支こけしは、批判に悩む時期に励まし続けてくれた弟が41歳の若さで亡くなり、その悲しみから立ち上るろうと始めたものだ。

「古里の父



目が据わっている表情のこけしは「二日酔父ちゃん」

母を思い出す」としみじみ話した東京の客、亡き息子の似顔絵こけしを作り、「これで息子と一緒にいられる」と涙した客…。手に取る人の思いに触れ、また自らも数々の逆境や、弟、父、母の死を経験して思うことがある。「楽しいことより、大変なことや悲しいことが多いのが人生。苦しいとき、悲しいとき、ほんの一瞬でも笑いや和みを届けられるこけしを作っていきたい」。木地作りを担当する夫の茂さん(67)と共に木に向かい合う。